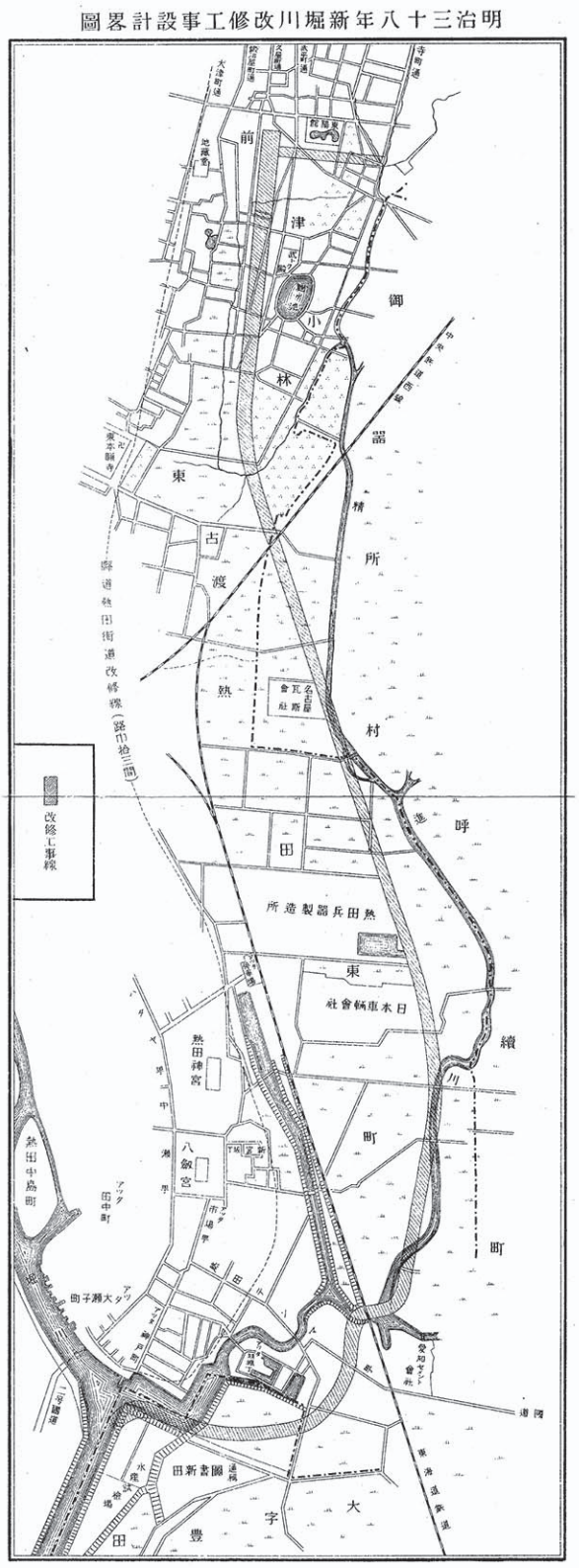
新堀川の開削

着手できない精進川の改修

当時の名古屋や熱田の市街地東側に幅が狭くて勾配の緩い精進川が流れていた。台地に挟まれたこの川は、大雨により氾濫しやすく、「一朝降雨連日ニ亘レハ雨水汎濫濁流横溢時ニ田圃ヲ浸シ或ハ道路橋梁ヲ決潰シ其甚シキニ至リテハ沿川ノ地帯ヲ挙テ一大湖沼ト化セシム」という川であった。



（名古屋市史 ： 地図編）

すでに文政 11 年（1828）に、藩により改修が計画されたが実行に至らなかった。明治4～5年頃には、庄内川から取水する運河をこの地域に開削して、水害の防止と市東部へ新たな舟運路を開く計画がたてられたが気運が盛り上がらなかった。

16 年には、名古屋区長の吉田禄在が区内東部での新水路開削を県令に建議し測量も行ったが、やはり実現できず、18 年になると地元の有志により興東会がつくられ、庄内川からの運河計画を実現しようとしたものの、反対もあり挫折している。

さらに 29 年には市長が、中央線の千種駅設置が予定されるなか、熱田港と千種駅を結ぶ新運河開削の調査を市会に諮問して、市会も必要を認める答申をしたが開削できず時が過ぎていった。

日露戦争をきっかけに開削

永い停滞を脱して実現するきっかけになったのは日露戦争である。明治 37 年2月、日露戦争が勃発し、兵器増産のため 11 月に軍が熱田にあった鉄道車輌製造所の跡地を拡張して東京砲兵工廠熱田製造所を設置した。低地なので 1.8 mほど土盛りをする計画だ。このまま土盛りをされると精進川の流れはますます悪くなる。

市は、永年の懸案である精進川を改修して、そこから出る掘削土を軍に売れば工事費の一助になると考え、工事の実施を決めた。38 年 10 月6日、起工式が執り行われ、工事を開始した。

本川の延長は 5.7km、幅は 23.6 ～ 27.3m、深さは朔望干潮面（最低干潮面）から 0.9m である。東へ延びる支川の延長は 391.3m、幅は 10.9m であった。

当時は人力での施工が大半を占め、たくさんの土工が働いていた。トラブルも多かったようで、『前津旧事誌』に「工区を4区に別ちしため請負者を異にせる区境に於ては土工の紛争屡々起り、為めに土運車に抜身の日本刀を突立て或は腹巻の間に短刀を包むなど、工事場の土工間に殺気満ち満ちて一時は附近住民ら安き心なく、婦女子らの通行杜絶せる事ありたり」と書かれている。活気と喧噪に満ち荒々しい現場の雰囲気が伝わってくる記録である。

改修なった精進川（新堀川）
（『愛知県写真帖』明治43年）

努力の甲斐あって 43 年2月 22 日に通水式が行われた。

この川の完成により、まだ生産量が少ない名古屋瓦斯㈱（現:東邦ガス）でも、原料の石炭を堀川で陸揚げして車馬で運んでいたのが工場まで直接船で運ぶことができるので、月に 300 円（この頃、大工の日当は 90 銭）の経費節減になると新聞に書かれている。

熱田と名古屋の舟運は 300 年にわたり堀川一本で支えてきたが、ここにもう一つの舟運路が拓かれたのである。